

キタのまちのニュースレター



2020年11月21日 / 会場・北区民センター：フォーラム「扇町マナビバ」におけるフラセッション

Interview

高田富子

ハラウフラオメハナ・フラダンス講習会 講師

北区で集うフラ

ハワイの民族舞踊であるフラは日本でも親しまれていますが、今回はその魅力について探っていこうと思います。大淀コミュニティセンターでは毎週金曜の朝にフラダンス講習会が行われており、講師はフラ教室“ハラウフラオメハナ”のインストラクターである高田富子さんが務められています。受講されている方を見てみると地域のさまざまな年代の方が通われています。その理由は为什么呢？

高田さん「フラは年齢、性別に関係なく一緒に楽しめます。もちろん年齢にあった踊りがあり、子供は子供らしく、体力のある若者は腰を落としてしなやかに。年齢を重ねた方はその経験に基づいた豊かな表現力が必要とされるんです。ハワイの人々は歳を重ねた人を『知恵を授けてくれるとても大切な人』と敬意を込めて“クプナ”と呼びます。多世代の方とのおつきあいはお互いに学び

あえていいことだと思います。それにフラは全身を使うので体幹も鍛えられて、健康にもとてもいいんです」

自分が重ねた経験を踊りで表現できるというのは魅力的です。それは今の自分を見つめ直すきっかけにもなるのではないのでしょうか？

高田さん「私はとあるダンサーのショーを見たのがきっかけでフラを始めたのですが、その方からあるメッセージを受け取ったような感覚になり思わず涙があふれてしまいました。『Hula is Life』(フラは人生そのものである)という言葉がありますが、フラは人柄や生活が踊りに表れると思うんです。素敵なフラを踊るためにも毎日を大切に丁寧に暮らそうと心がけています」

そして今、高田さんは来年3月に『マナビバフラカンファレンス』という“フラでつながるコミュニティイベント”を企画されています。そこではより詳しく気軽にフラの世界を楽しむワークショップやステージを計画しているとか？

高田さん「フラは歌詞の内容を手話のように伝える踊りなので、色々なことをイメージすることにより想像力がとても豊かになります。また身の回りの小さな発見にも感動するようになり、そのことを仲間とシェアしあえることはとても幸せなことだと思います。それがみなさんのコミュニティの場になればより嬉しいです。歌はハワイ語ですが、言葉の意味がわからなくてもダンサーの表情から何を伝えようとしているかを感じ取っていただければいいなと思います」

古代のハワイには文字がなく、豊かな自然に囲まれながらその自然を神と崇め暮らしていました。自然に対する感謝や祈りを伝える手段としてフラが広がっていったと言われていますが？

高田さん「コロナ禍で触れ合うことを『控える』ことが増えました。そこで、自分の感情や思ったことを別の『言葉』として語りあうフラをおすすめします。ぜひいかがでしょうか!」



Kalalaua Festival Hula Competition 2015

「フラ」を楽しむマナビバ情報

▲お聞きした高田富子さん(右写真)を中心に「フラでつながるコミュニティ」をテーマに『マナビバフラカンファレンス』計画中!▲日程は来年3/12(土)・13(日)の2日間。会場は北区民センターで「子どもも大人も楽しめ」「フラとともにモノづくり体験」「意外なコラボ」も▲フレンドリーで情熱家の高田さんが丹精込め計画中の「フラでつながるコミュニティ」……今から楽しみです▲詳細は来年1月末頃に北区民センターのホームページ等でご案内します。

地域の魅力再発見

なんと支流の数965!
日本一の淀川・最北の源へ

福田 知弘

大阪大学大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 准教授
NPO法人 もうひとつの旅クラブ 理事

北区を流れる淀川と大川。そもそも、どこから流れはじめているのでしょうか？

同じ流域内にある河川、湖、沼などを含めて「水系」と呼びます。淀川と大川は大阪、兵庫、京都、奈良、滋賀、三重の2府4県にまたがる「淀川水系」です。淀川水系は「淀川三川」と呼ばれる桂川、宇治川、木津川その他、琵琶湖と琵琶湖に流入する河川が含まれ、淀川全体の支流の数はなんと965本、「日本一！」つまり、淀川は、それらのたくさんの源や地域とともにあります。今回は、その最北、淀川の源へのご案内します。

琵琶湖の北、JR木ノ本駅から余呉バスに乗りかえ中河内へ。出発すると田園風景がすぐにはじまり、余呉を過ぎると山あいの道に入ります。バスに揺られ、樺坂峠を越えると終点の中河内に着きました。この集落はかつて、北国街道の宿場町として「(福井県の)今庄朝立ち 木之本泊まり 中河内で昼弁当」と詠われ、旅人にとって重要でした。全国でも屈指の豪雪地帯です。

北国街道を歩き中河内集落から「淀川の源」、高時川の碑へ(下写真)。カエルの大合唱が谷間にこだましていました。この先に集落はもうなさそう、50分ほどのハイキングです。

石碑の裏には「河川の恵みに感謝して」と刻まれています。この地点から淀川の河口まで地図で測ると直線で131kmもありました。ここに降った雨水が土にしみ込み、やがて高時川として流れ、淀川に届くのでしょう。石碑からさらに少し歩くと栃ノ木峠、滋賀県と福井県の県境です。分水嶺でもあり、橋の下を流れる孫谷川は日本海へと流れます。

笹舟を浮かべました。地域を見届け大阪湾まで運よくたどり着けたとすると、いつのころになるのでしょうか。琵琶湖の北で大阪・北区の起源に触れた不思議な気分になり、地域のつながりを再発見しました。コロナが収束したらまた訪ねたい「源への旅」でした。



北区に出会った気分？高時川の「淀川の源」の碑。

ツキイチ屋台から

『まちづくり』って？

岸上 純子

建築家・ツキイチ屋台女将

なかなかコロナ以前のような日常が戻って来そうにありませんが、みなさんいかがお過ごしでしょうか？「ツキイチ屋台」もコロナの影響でここ最近全く開催できずです……。



いまどきの日常・都心の公園「ある週末の風景」

そんな中、いくつかの『まちづくり』についての取材を受けました。

『まちづくり』と言ってもその捉え方は多様で、私自身『まちづくり』っていったいなんなのだろう？私のやっていることは『まちづくり』と言っていいのか？と自問自答することが多いです。

みなさんにとって『まちづくり』という言葉の持つイメージはどんなものでしょうか？

大きなものでは、都市計画？再開発？……なんだか大きすぎて個人の範疇ではなさそうですね。

小さいものでは、自治会？町内会？……なんだか大変そう……それって役所の人とか役員さんがやることでしょ？っていうイメージの人も多いんじゃないでしょうか。

ちょっとでも『まちづくり』に興味のある人は、「まちを魅力的にするためにイベントしたりすること」っていうイメージでしょうか。確かにどれも正解です。

でも、やっぱりどうしても『まちづくり』って大変そうなイメージがあると思うんです。

しかし、『まちづくり』についての取材の中心は『身近なまちや生活に興味を持つきっかけとなるもの』だった気がします。『身近な』というところが大切で、コロナ禍で、より『身近な』ものが大切になってきているんじゃないでしょうか。

最近よく目にする風景は『まちの余白を使って余暇を上手に過ごす人たち』です。これこそ『まちづくり』だ！と、私は思いました。

『まちづくり』の本質は『まちの魅力づくり』だと思います。そこに人がいなければ、魅力的とは言えません。もちろん「その場」自体をつくるのも『まちづくり』ですが、そこを『楽しく使う』ことも『まちづくり』だ！と思ったんです。

私の『ツキイチ屋台』も私だけが『まちづくり』をやっているわけではなく、来てくださるみんなも『まちづくり』をしてきているんだ！と!!

そう思うと『まちづくり』って身近になってきませんか？

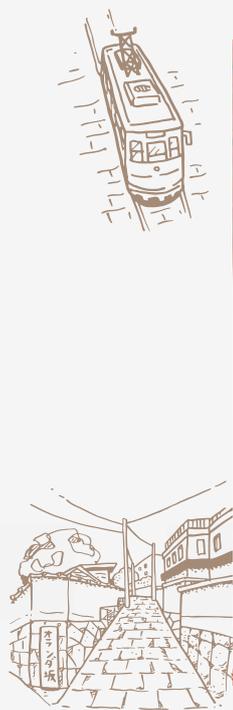
さあ！みなさんも身近な場所に目を向けて、一緒に『まちづくり』しませんか？

キタ歩き日本旅



長崎県
の巻

日本47都道府県中、北区の「大阪駅前ビル」には、その約半数にもおよぶ道府県事務所が立地しています。それはまるで、ご近所から「旅」の趣です。そこで「キタ歩き日本旅」と題して各県をご紹介します。お楽しみください。



ハイセンスな「かもめ」のデザイン。洗練された車内も楽しみです。

大阪駅前ビルの道府県事務所を巡り全国を旅する第2回目は長崎県大阪事務所です。長崎県は自然の恵と祈りの歴史が解けた、島と半島のロケーションが魅力です。同事務所の水谷大吉さんにお聞きしました。

—世界遺産に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」と「明治日本の産業革命遺産」があります。大阪の方は、日本二十六聖人記念館に注目です。太閤さん(豊臣秀吉)との歴史が壮絶で、展示物の厚みに息をのみ、立ちすくみ、「時代」の事実には圧倒されます。

—生活文化では江戸期の「くらわんか茶碗」です。当時、日常陶器が大阪弁で全国展開されました。生産は波佐見の窯が独占しました。現在はアート性豊かなデザ

イン陶器が有名で観光地としても大人気です。

—長崎は「島の魅力」も格別です。数々の魅力がありますが「ビーチの魅力」では、五島・高浜の美しさに驚嘆します。延々と遠浅で正真正銘のエメラルドビーチ! 本当に驚きます!!

「味の魅力」はいかがですか? と、問えば……

—山海の恵みに事欠きません。とにかく素材が素晴らしい。それはそれとして、郷土料理にも注目です。島と半島の地形的な事情から、オリジナル性の高い郷土料理が受け継がれています。卓袱料理はその代表格ですが島原の具雑煮、大村の大村寿司、五島の手延べうどん、対馬の石焼き、松浦のアジフライ、東彼杵

のくじら料理、等々……若者には「佐世保バーガー」。

旅のトピックは?

—来年秋頃、西九州新幹線が開業予定です。武雄温泉～長崎間に新幹線が走り、博多には武雄温泉で在来特急との「対面乗り換え方式」でつながります。……ということで、その新幹線が走る諫早駅の駅長・山口哲矢さんにもお聞きしました……

「新大村や諫早をキーに島原方面など、長崎の新しい周遊観光が楽しみです。オシャレな『かもめ』の車両デザインも発表されました!」との弁。

未知の魅力に惹き寄せられて、「わたしだけの長崎の旅」をプランしてみたくなりました。ありがとうございました!

浪花百景歳時記

浪花百景ピクニック 「十三中道」南粹亭芳雪

行楽の秋だがコロナのご時世、遠方への旅行はためらわれる。せめて錦絵に幕末のピクニック気分を楽しむことにしよう。取り上げた作品は、虹の架かる田園を男女が仲良く歩いている。「十三中道」は阪急十三駅付近かと思われるが、東大阪から奈良へとつながる「十三街道」とする異説もある。それを紹介するので、郷土史家・大村寿郎さんの歴史を巡る知的なピクニックをお楽しみください。

大阪大学教授 橋爪節也



研究ノート

郷土史家 大村寿郎（北区在住）

昔・今・未来はひとつながり。また、「今だけ」にひかれすぎ「その場所だけ」を見ていては、逆にこぼれ落ちる魅力もある。そんな理由から浪花百景に注目し、現在の「北区域に接する場所」から北区の「わが町」を楽しんでいる。

ある発見をした。浪花百景「十三中道」（上の絵）は、現在の北区あたりから渡る「十三の渡し」の北の風景とされてきた。が、「どうもおかしい」ということに気付いた。何故か？ そそも当時の歳時記の風景に欠かさない「十三の渡し」が描かれていない。旨いもの地域代表「十三の焼餅」も絵にない。歳時記的に検証すれば「辻褄があわない」というわけだ。

では、いったいどここの風景か？「月瀬尾山梅溪道の栞」（左下・出典図絵を一部拡大）には、天満橋から玉造・深江を抜ける「十三街道」が描かれている。付近には遊所の誉れ「中道村」があった。調べると、この情景は当時の中道村、現在の東成区中道付近と推察される。歴史・文化を調べると発見があり、未来にも出会う。このカップルが、江戸末期、現在の北区の川向うから「キ

タ」に来て、キタのまちも楽しみつつ（まったくの空想だが）ピクニック……男の手に瓢箪徳利が確認できる。中身は水、お酒、さてどっち？…十三街道を中道まで来たのでは、と。

当時のピクニックを思い描くと、現在を通り越し「観光の未来」も見えてくる。アフターコロナの「オオサカ観光」とは一体どのようなものか？ 小さな船旅、キタのまち、「天マ（天満）」を抜けて街道をゆく……。未来に幸多かれと願うばかりだ。



編集後記

本紙の編集では知らないことばかりに出会い、戸惑うこともあります。それはこのニュースレターに多様性があるからだと思います。だからこそ本紙が誰に、どのように興味を持ってもらえるのか期待と緊張が入り混じった思いで編集しております。もしこの記事が良かった等の感想がございましたら、窓口にお声がけください。職員が喜びます。

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室

■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会

■発行月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター 〒530-8401 大阪市北区扇町21-27
☒ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp

大淀コミュニティセンター 〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
☒ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp